

関西学院大学大学院 2026年度 第2次 社会学研究科 入学試験問題

	試験科目 社会学専攻	専門科目
試験時間	90分	辞書の使用は認めない 1 / 1

解答は、別紙に記入すること。
なお、解答する問題については、いずれの出題分野でも構いません。

I. 次の4問の中から1つを選んで答えなさい。(30点)

- A. 社会学は「常識を疑う」学問だといわれることがある。この考えが開く可能性と、それがもつ問題点について、なんらかの具体例を挙げながら論じなさい。【社会学】
- B. 生殖技術の進展とそれに伴う社会・文化の変革を指す「生殖革命」の進行は、現代社会における家族や親子のあり方にどのような影響を及ぼしたといえるか。具体例を引きながら論じなさい。【文化人類学・民俗学】
- C. 山岸俊男が提唱した信頼 (trust) と安心 (assurance) の違いを述べ、このうち特に信頼の持つ社会的機能について説明しなさい。【社会心理学】
- D. 現代は「第二の近代」「後期近代」「高度近代」などと呼ばれることがある。これがそれ以前の「近代」とどのように異なるのか、なんらかの具体例を挙げながら論じなさい。【社会学】

II. 次の4問の中から1つを選んで答えなさい。(30点)

- A. 対人認知における「ヒューリスティック」(またはヒューリスティック的認知) の代表例を2つ以上挙げ、その内容を説明しなさい。【社会心理学】
- B. 現代社会において「労働」にはどのような変容が見られ、そこにはいかなる問題が生じているのか。これについて、2つ以上の具体的な事例を挙げながら論じなさい。【社会学】
- C. 贈り物を贈ること、それに対して返礼を行うことをめぐる文化人類学や民俗学の蓄積について、2人以上の研究者の名前を挙げて、具体的な内容を説明しなさい。【文化人類学・民俗学】
- D. 「宗教」が社会において果たす役割について、これまで社会学はどのように論じてきたか。これについて、2人以上の社会学者の議論を挙げながら論じなさい。【社会学】

III. 次の用語の中から4つを選んで説明しなさい。(10点×4)

1. 疑似イベント【社会学】
2. 現代社会の民俗【文化人類学・民俗学】
3. 将来の予測における計画錯誤 (planning fallacy)【社会心理学】
4. 人種関係サイクル論【社会学】
5. 手続き的公正 (procedural justice)【社会心理学】
6. 多文化共生【文化人類学・民俗学】
7. 性別分業の多様性【文化人類学・民俗学】
8. エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』【社会学】
9. 病人役割【社会学】
10. 集団思考 (groupthink)【社会心理学】
11. 記憶の気分一致効果 (mood congruent memory)【社会心理学】
12. 観光のまなざし【文化人類学・民俗学】
13. 先住民の文化【文化人類学・民俗学】
14. フリーライダー【社会学】
15. フォールス・コンセンサス (false consensus)【社会心理学】

関西学院大学大学院 2026年度 第2次 社会学研究科 入学試験問題
(出題の意図・解答例)

【出題の意図】

I. II.

社会学、社会心理学、文化人類学・民俗学の中から一つの分野を選び、設定された特定の論点について専門知識を用いて論理的に議論を展開できるかを問う。

III.

社会学、社会心理学、文化人類学・民俗学における基本的な概念・用語について、十分な知識を持っているかを問う。

【解答例】

各設問への解答としては、以下に列挙する内容や論点をカバーしたものであることを想定している。とくに論述問題に関しては、受験生の自由で独自の発想による記述を評価する。なお、分野別に指定されている教科書の該当箇所については、巻末の索引なども活用していただきたい。

解答は、別紙に記入すること。

なお、解答する問題については、いずれの出題分野でも構いません。

I. 次の4問の中から1つを選んで答えなさい。(30点)

A. 社会学は「常識を疑う」学問だといわれることがある。この考えが開く可能性と、それがもつ問題点について、なんらかの具体例を挙げながら論じなさい。【社会学】

(盛山和夫他編『社会学入門』p. 329)

- ・「常識を疑う」という社会学観は、広い意味での構築主義に属する理論的な潮流を背景にしており、社会の制度や規則、組織や集団は「作られたもの」であって、「自然的要因」に基づいたものではないことを強調する。これは、現実を自明のものとしなない視点を開く。
- ・他方、客観的で普遍的に正しい知識を探求するという学問そのものの価値に疑いを突きつけることになり、社会を構想するという社会学の重要な課題を困難にする可能性がある。
- ・この問題は、なんらかの事例を挙げて、「常識を疑う」という社会学観をとらえ直すことで、受験者の「社会学」という学問そのものへの見方を問うことをねらいとする。

B. 生殖技術の進展とそれに伴う社会・文化の変革を指す「生殖革命」の進行は、現代社会における家族や親子のあり方にどのような影響を及ぼしたといえるか。具体例を引きながら論じなさい。【文化人類学・民俗学】

(綾部・桑山編『よくわかる文化人類学』p. 54-59)

- ・人工受精、体外受精・胚移植の実用化に加え、精子・卵子や胚の凍結保存技術の進展、あるいは非配偶者による精子・卵子の提供や代理母出産などの制度化が「生殖革命」をもたらしてきたこと。
- ・その結果、性と生殖の分離がすすみ、かつて自明視されていた性・生殖・婚姻の一致という大前提が崩れたこと。
- ・これらの変化を受けて、親子や家族のあり方をめぐる社会・文化観が変動しつつある事例を示す。

C. 山岸俊男が提唱した信頼 (trust) と安心 (assurance) の違いを述べ、このうち特に信頼の持つ社会的機能について説明しなさい。【社会心理学】

(池田謙一ら『社会心理学』 p. 302)

- ・社会的な不確実性 (他者が協力・非協力いずれを選択するかの予測可能性) が低い状況で機能。
- ・安心=法律 (罰則) を含む制度にもとづき「相手の自己利益に根差した行動」への確信。
- ・信頼=制度の外側、相手の善意や誠実性にもとづく期待。
- ・人間全般への一般的信頼と、知り合いなど過去の履歴にもとづく人間関係的信頼。
- ・一般的信頼は、人々が未知の他者との資源交換つまり新しい人間関係を作っていく上で重要。

D. 現代は「第二の近代」「後期近代」「高度近代」などと呼ばれることがある。これがそれ以前の「近代」とどのように異なるのか、なんらかの具体例を挙げながら論じなさい。【社会学】

(盛山和夫他編『社会学入門』p. 11, 24-6)

- ・近代社会が新しい局面に入ったのではないかという議論が1990年代以降なされるようになった。これを、アンソニー・ギデンズは近代を駆動してきた「再帰性」が徹底して働くことの帰結として「高度近代」、ジグムント・バウマンは伝統的共同体から個人を解放してきた「流動性」が近代を構成するさまざまな中間集団にも及ぶ「液状化近代」ととらえた。
- ・これに関係する変化は自己、家族、共同体、企業、労働、福祉国家、エスニシティ、グローバリゼーションなど多くの側面に見られるため、受験者がどのような具体例を挙げて論じるのかを見ることで、「現代社会」をどう理解しているかを知ることができる。

II. 次の4問の中から1つを選んで答えなさい。(30点)

A. 対人認知における「ヒューリスティック」(またはヒューリスティック的認知)の代表例を2つ以上挙げ、その内容を説明しなさい。【社会心理学】

(池田謙一ら『社会心理学』 p.32)

- 代表性ヒューリスティック=評価対象が属するカテゴリーを用いた評価ないし推論過程。
「値段が高価な品物は品質がいい」などが一例、ステレオタイプの判断も例となり得る。
- 利用可能性ヒューリスティック=対象の頻度や珍しさを用いた推論過程。
珍しい死亡原因ほどマスメディアの報道量が多いため想起されやすく、実際には少数である。死亡原因が頻繁に生じているように認知される、少年犯罪の報道も同じ。

B. 現代社会において「労働」にはどのような変容が見られ、そこにはいかなる問題が生じているのか。これについて、複数の具体的な事例を挙げながら論じなさい。【社会学】

(盛山和夫他編『社会学入門』 p.84-92)

- 日本では1990年代以降、学校から仕事への移行システムが変化し、非正規雇用者やフリーターの増加が見られ、「企業コミュニティ」「日本的雇用慣行」などが揺らいできた。過労死やブラック企業を問題視し、ワーク・ライフ・バランスを重視する動きも進んでいる。
- グローバリゼーションによって工場の海外移転、外国人労働者の増加が生じるとともに、感情労働やケア労働へのシフト、AIによる労働環境の変化など、働くこと自体の質も変容し、労働をジェンダーやエスニシティの視点からとらえる重要性も高まっている。
- この問題は、「労働」という現象を通して、受験者が現代社会の変容に対してどのような問題意識をもち、いかなる分析枠組みでそれを論じるのかを見ることをねらいとする。

C. 贈り物を贈ること、それに対して返礼を行うことをめぐる文化人類学や民俗学の蓄積について、2人以上の研究者の名前を挙げて、具体的な内容を説明しなさい。【文化人類学・民俗学】

(綾部・桑山編『よくわかる文化人類学』 p.26, 38-45)

- マリノフスキーが提示したクラ交換の原理、モースによる「全体的給付」、ポランニー及びサーリンズが提唱した互酬性の類型などが説明されていること。
- 個別の民族誌事例や現代社会で問題となっている新たな交換形態のような具体的事例を併せて示してもよい。

D. 「宗教」が社会において果たす役割について、これまで社会学はどのように論じてきたか。これについて、複数の社会学者の議論を挙げながら論じなさい。【社会学】

(盛山和夫他編『社会学入門』 p.255-268)

- 社会学では、ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、デュルケム『宗教生活の原初形態』などの古典以来繰り返し宗教を論じ、前者は個人のなかにエトスを生み近代化を進める動力、後者は集団を結びつける儀礼として宗教を位置づけた。
- また、近代における「世俗化」で宗教の社会的意義が減少しているという立場(ウィルソンなど)、制度的組織ではなく個人に内面化した「見えない宗教」として生き残っているとする立場(ルックマンなど)など、現代社会と宗教の関係についても対照的な見方がある。
- 受験者がこれらの議論からいくつかを選んで論じることで、社会学的研究についてどれだけの知見をもっているかを把握し、それらを比較して論述する力を評価することができる。

III. 次の用語の中から4つを選んで説明しなさい。(10点×4)

1. 疑似イベント【社会学】

(盛山和夫他編『社会学入門』 p.245)

ダニエル・ブーアスティンがアメリカ社会を覆う「幻影」に警鐘を鳴らして提唱した概念。ウォルター・リップマンは、人と環境のあいだに「疑似環境」が挿入されつつあると指摘したが、ブーアスティンはマスメディアが事件をゆがめて伝えるだけでなく、自らイベントを作り上げる力を持ち始めた論じた。

2. 現代社会の民俗【文化人類学・民俗学】

(綾部・桑山編『よくわかる文化人類学』 p.206)

今日の民俗学は、同時代に生きる農民、鉄道員、野球選手、オフィスワーカー、医師などもそれぞれが属する集団が持つ伝承や民俗を研究対象にする。具体的には、都市伝説、グラフィティ、ハロウィンなどもフォークロアとして研究されるようになった。つまり、都市化した現代社会においても民俗が生まれているとの認識がある。

3. 将来の予測における計画錯誤(planning fallacy)【社会心理学】

(池田謙一ら『社会心理学』 p.96)

自分が将来に行う作業の時間量を実際よりも過少に見積もる楽観視的な認知傾向。

4. 人種関係サイクル論【社会学】

(盛山和夫他編『社会学入門』 p. 132)

異なる人種集団が「接触」すると、①希少資源の獲得をめぐる「競合」し、経済的に分業する段階、②それが競合集団への政治的攻撃に転化する「葛藤」の段階を経て、③競合や葛藤によるコストを削減するために各集団が文化的独自性をもったまま「適応」し、④ついには競合集団の文化や価値を完全に受容する「同化」の段階にいたるとする見方。ロバート・パークがアーネスト・バージェスとともに編集した『社会学という科学への入門』で提起した。

5. 手続き的公正 (procedural justice)【社会心理学】

(池田謙一ら『社会心理学』 p. 168)

資源の分配や交換の結果そのものの公平性に対する評価 (分配的公正) ではなく、分配の手続きすなわち決定までの過程の公正性に対する評価であり、司法手続きなどで重視される。

6. 多文化共生【文化人類学・民俗学】

(綾部・桑山編『よくわかる文化人類学』 p. 86, 109, 157, 240-241)

国内外の人の移動 (労働を目的とする移動、日本から国外に移動した人々の還流移動など) の加速に伴って、日本社会内部の文化的多様性が可視化し、国家や自治体主導で多文化共生が謳われるようになったが、現実には様々な摩擦が生じ、またマイノリティの文化の中の多様性が捨象される問題などが生じている。

上記に加えて、他国で取り組まれてきた多文化主義に関する政策への言及があっても良い。

7. 性別分業の多様性【文化人類学・民俗学】

(綾部・桑山編『よくわかる文化人類学』 p. 76-77)

性別に基づく分業を考える際に、現代日本社会で当たり前と考えられてきた分業のあり方を他の社会にそのまま当てはめることはできず、同じ文化に属する女性であってもその中に年齢、世代、階層、教育などに基づく多様性がありうる。

8. エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』【社会学】

(盛山和夫他編『社会学入門』 p. 132)

フランクフルト学派の初期の代表者フロムが、ドイツでナチズムが民主的選挙で選ばれた背景を説明した 1941 年の著作。ヨーロッパ内で後発国だったドイツでは近代化が急速だったため、人々は既存の人間関係から切り離されて「原子化」し、孤独と不安を抱える。この傾向がもっとも強く見られた下層中産階級の人々は、権威主義、破壊性、機械的同一性による逃避のメカニズムのなかで、強いリーダーの支配を自ら望み、自由を捨てることになった。

9. 病人役割【社会学】

(盛山和夫他編『社会学入門』 p. 194, 202)

タルコット・パーソンズが 1951 年の『社会体系論』で提起した概念。病人が一定の社会の成員であり、役割に対応する権利と義務を担っていることを提示した。①病気の状態に対する本人の責任の免除、②通常の役割からの一時的免除、③病気の状態からの回復義務、④専門家の援助を求めこれに協力する義務、の 4 つの要素から構成される。

10. 集団思考 (group think)【社会心理学】

(池田謙一ら『社会心理学』 p. 358)

集団内でのメンバーの意見一致を重視して異論や少数派を排除する、あるいは集団の能力を課題に見積もるなどの要因により、結果として (集団に不利益にもたらず、取り返しのつかない犠牲を生むなどの) 愚かな決定を行う傾向のこと。凝集性の高い集団で発生しやすい。

11. 記憶の気分一致効果 (mood congruent memory)【社会心理学】

(池田謙一ら『社会心理学』 p. 46)

喜びなどの感情は、それを喚起させた出来事の記憶とつながりやすいため、たとえば気分 (弱い感情状態) のよいときには好ましいことのほうが記憶されやすく、また過去の経験でもうれしかった記憶や楽しかった記憶が想起されやすい。

12. 観光のまなざし【文化人類学・民俗学】

(綾部・桑山編『よくわかる文化人類学』 p. 160-62)

「観光のまなざし」とは近代以降の観光現象を分析した J. アーリの著作で示された用語であり、観光者が「自分が習慣的に取り囲まれているものとは異なった尺度あるいは異なった意味をとまなうようなものへの強烈的な愉楽への期待」を持つことを指している。

こうしたまなざしの対象となる観光地の人々自身の対応についての言及があればなお良い。

13. 先住民の文化【文化人類学・民俗学】

(綾部・桑山編『よくわかる文化人類学』 p. 70-179)

「世界の先住民の国際年」制定とそれに続く「世界の先住民の国際の 10 年」や国連総会における「先住民の権利に関する国連宣言」の採択などの国際的な動向のもとで、日本の内外においても先住民の文化、アイデンティティ、言語などをめぐる権利保障の動きが加速したが、文化的営みを含む先住民研究も、様々な問題を孕みつつ、先住民自身が調査される側から調査する側に回ったり、研究を脱植民地化するための新たな方法が模索されたりしている。

具体例として、「アイヌ文化振興法」など国内法の進展と残された多くの問題への言及があればなお良い。

14. フリーライダー【社会学】

(盛山和夫他編『社会学入門』p. 115)

資源動員論は、社会運動について「利益を得る／得ない」「参加する／しない」を組み合わせて4つのセルを作ったが、「利益を得る×参加しない」にあたる類型をさす。参加せずに利益だけ得るフリーライダーが組織の多数派を占めれば企業は経営の危機に瀕し、社会運動では目標達成がおぼつかなくなる。マンサー・オルソンはこれを「フリーライダー問題」とし、①フリーライダーを監視できるくらい集団が小規模である、②共通利害以外に貢献度に応じた選択的誘引を提供する、③強制する、という3つを解決法としてあげた。

15. フォールス・コンセンサス (false consensus) 【社会心理学】

(池田謙一ら『社会心理学』 p. 194)

他者と自分との思考や判断の一致に対する過大視であり、自分と同じ意見を持つ他者が実際よりも多数存在するとみなす傾向のこと、「合意性の過大推測」。